

トロンボーンのための歌曲

Song for Trombone

横山真男 2026 年 5 月初演

この作品は、トロンボーンの演奏音をマイクでひろい、フォルマント合成により人の歌声（もどき）に変換してスピーカから再生することを試みたライブエレクトロニクス作品である。

歌詞には古典の『平家物語』における名歌人として称えられた源三位入道（源頼政）の和歌を取り挙げた。頼政は源平合戦の乱世において武将として、また風流人としても名高かったが、しかし謀反を企て宇治平等院にて壮絶な最期を遂げた。本作品では、物語の第 4 巻 12 章「御宮最期」と 15 章「鶴（ぬえ）」の和歌から以下のように構成している。

第 1 曲

頼政は摂津源氏の血をひく。戦で活躍するも時は平氏の時代であるゆえ、待遇は薄く不遇の時を過ごした。その日陰の存在である心中を表す歌を詠み、正四位下として昇殿が許される。

人知れず 大内山の 山守は 木隠れてのみ 月を見るかな

第 2 曲

弓の達人でもあった頼政に武運を上げる事件が起こった。夜な夜な御殿に現れ主上（天皇）を悩ます怪鳥の鶴（ぬえ）が現れるようになり、頼政は二本の矢で見事に退治する。鶴は「手足は虎にて軀は牛、頭は猿にて、尾は蛇に似たり」という妖怪である。

第 3 曲

妖怪を退治した褒美として獅子王という名の剣を授かる。左大臣（藤原頼長）から受け取る際にほととぎすが鳴いたので、上の句を頼長がよみ下の句を頼政が返した。

ほととぎす 名をも雲居に あぐるかな ゆみはり月の いるに任せて

第 4 曲

しかし、頼政は以仁親王と共に清盛打倒の謀反を策略する。しかし、それは清盛に漏れ伝わり、頼政軍は宇治平等院に立てこもる。宇治川を渡せまいとして橋板を外したりして懸命に平家勢を抑えようとするも、馬筏により平氏の大群に川を渡り切られてしまう。

伊勢武者は みなひをどしの 鎧着て 宇治の網代に 懸かりぬるかな

第5曲

もはやこれまでと悟った頼政は、以仁親王をわずか30騎を従えて逃がす。子の仲綱・兼綱も懸命に戦うも息絶えてしまい、頼政が自害に先だって詠んだ辞世の句。

埋もれ木の 花さくことも なかりしに 身のなる果てぞ 悲しかりける

そして、念仏を10回唱え自ら腹に刀を突きさし、部下の唱（となう、渡辺長七唱）により斬首を頼む。その後、頼政の首は平家の手に渡らぬよう、部下の唱により石と共に宇治川の深き所に沈められ、ついに見つかることはなかったという。